

宗學への悩み

中 澤 要 實

一、いはんとする悩みとは

宗學への悩みと言つたからとて、本化宗學が卑賤低級なるものであると云ふ意味ではない。と云つて本化宗學が余りに廣遠且大であるが故に究理困迷の世界にありすぎると云ふ筋合でもないのである。勿論腦留守な私にはないでもない。佛陀は此法華經は難解難入と説かれた程であるから。されど幸哉、宗祖は唱題を以つて末法の易行と遊ばされて下されたが故に單信流入する事の出来ることは下棧の喜悅とすべき所である。されば何かと云ふに本化宗學の實踐性、行動性について現在の寺院の制度下に於ける宗徒が如何に宗學の指示通りに生きてゐないか、或はゐられないかと云ふ点である。勿論これはたとゝ宗徒の罪とすべきではないが宗徒として目覺むべき所も

多々あるのではなからうかと思ふのである。この迷ひは事幾分違ふかも知れないが且て中村又衛氏の「信後の悩み」(宗教公論四卷二號)にも似たものであるかも知れないと思ふ。

二、宗學の行動性

本化宗學を大分して二とし、教相門と實踐門と分つ。教相は五網を立て實踐門は三秘即一秘の唱題の實踐化と云ふ事になつて所謂身口意の三業に實行せよと云ふのである。成程哲學的に考へても宇宙の眞理性である法華經本迹兩門の粹を取つて、それを實踐化し、而も現在までその實踐行動が続いてゐる事は事實である。この唱題の行法によつて弱者も強者に蘇り所謂利益と云ふものを得

てゐる。なれども現在に於て日蓮上人の如く、独自の信念のもとに法華經でなければどうしても救済されないといふ如何なる迫害の下にも言ひ切るものは幾人あるであらうか。ありとすれば單信の徒の間には盲蛇の譬の如くあるかも知れないが通途の宗徒は「おれではない、日蓮上人がかく言はれたまでを信じたまでだ」と遁辭し、時によ

りて日蓮上人の本意すらも曲解して、勢力に如同せしめんとする傾向すらもつものが多い。少くとも日蓮上人の独自の信念の如きものを吾等も持たなければ今後の宗學の存立の意義が危い。現に佛敎の敎團も既成的存在以上に出ない限りは没落の過程におかれてあると見てよいであらうか。それ何故かと云ふに現在の佛敎寺院の存続は漸くにして昔時からの因襲によりて、その命脈を得てゐるものであると見てよいであらう。良き因襲は既成敎團の經濟と精神的安定の礎であるが故に、その因襲の弱き寺院は正に没落は目捷である。何々山何々寺の名稱は嚴にして一なれど内容の微たるもの如何に多くあるかは生

活するものゝみの知る現狀である。この救済はどうすればよいか、私は云ふ、本化宗學に敎られたる五綱敎判を現代的に見直して進むことが第一條件であり、第二は敎團の組織的統制にある。この二條件の完備は本化宗學の再生であり、敎團の勃興であると思ふ。

三、敎判の見直し

先に述べた如く敎判は敎機時國序の五綱である。初の敎であるが釋尊出世の本懷である法華經と云ふ信念は結構である。この信念を如何に法華經でなければ駄目であるか。救済されないかと云ふ点を確固に敎學的論據を實證的に擲んで頂きたい。

次に國柄も時も機も違つた近時の狀勢である。これがなければ序所謂流通宣傳は出來ないのである。現代人の一般的機風は何時も法を求めてゐる。又法に飢えてゐるのである。なれども明治維新以來反宗敎的教育の下に科學的に進歩した近代人も近頃漸く信仰の必要さを知つて

來たが、それは何宗派でよい或は宗派でなくとも自己の性に合ふものでさへあればと云ふのであるから宗教心は幾分おきても益々寺院と人心と隔離されつゝあるは必然の理である。この人心に對機説法的にもねて行けと云ふのではない。この人心をして如何に本化の教であり行に依らなければ救済されない道であるかと云ふ事を教ゆるだけの力ある教理と行動形態を大衆的たらしめたいと云ふのである。具体案は斯道の大家に待つと同時に吾等も体験的信念より研究しだそうと思ふ。

四、教團の組織的統制

次に私は現教團を組織的統制あるものにする事が教團の復興であり勃興であると述べたい。それはあながち今日の統制ばやりの言葉に支配されて云ふのではない。むしろ現政府の統制問題たる米穀にしろ産繭にしろ、それ等に對してはむしろ反對の意見をもつ私である。されど教團に對しては統制は必要であらう。これも祐福な寺祿

と法子相續によるものは反對であらう。それは祐福なる家族制寺院生活に倣れた人間の本能的思想にあるエゴイズムによるからである。現在の寺院に對する宗務と云ふものは酷評すれば恐らく机上の皮算用より割出された宗費等の取り立ての統制以外には何ものもないと云ふ現状である。これで一体宗門發展、四海歸妙の理想の實現と云ふ事が行はれるであらうか。それに同じて本末寺院の關係に於ても然らんと云ひたい。或は吾人の曲解かも知れないが、かゝる感情を持たしめる現状に見ゆる事は悲しい事實である。此處に於て私の意見がある。都會寺院はいざ知らず農村寺院の現在に於ける安定せる生活状態は檀信の多數を有し、師檀關係の因襲的援助關係が深く結ばれ、寺祿の祐福に有する所に存續の可能性がある。然るにかゝる關係薄く宏壯なる類破的殿堂を有し、僅かの寺財たる不動産には二重課税があてられ、檀信の用務少き寺院は有名無實な存在である事は今更言を俟ない。正に没落淵底におかれてるのである。

これを知つて知らないものゝ多いのが現在の本山であり、宗務院である。たと役目的な事務にのみ没頭してゐて少しも伸張さすべき機關に具体的案がないのである。

その具体的案とは土地、状勢、人氣に對して、人材の該地に適するや否やの問題が起つて來る。此處に所謂教學の適用による組織的統制、即ち教は前に論じた故に機時國序の適用を進言したのである。例せば農村寺院に於けるこの地、この民に、この人氣に對しては如何やうな人間が適應し發展させ得るか。或はこの都會寺院にはと云ふやうに教師の按配、法器の活用の上に組織的統制あらしめたい事を今回信行道場が身延山に建設されるにつけても感ずる所である。更に教團の權能を社會的に力あらしめると云ふ事が、國家施政方針から云つても教化運動を徹底にならしめる所以である事を痛感しつゝ項を終る。

五、暗路にあがく

現在宗學は意義なきもの、活動性なきものであるとは云はない。それはむしろ自己の愚を發表するものであらう。實に妙法は高遠であり、永遠不滅の眞理であり、宇宙の定規であり、法理である事は感ずる。なれども現代の人心の上からは宗教心、信仰心の必要性は認められ且憑依せんとしながらも現在の寺院から遠ざからんとする傾向がある。敬遠的に忌避せんとするあるを見る時、教團人の教團の意義、存在の價値を認識せしめる事が大切である。教團人が敬遠をおそれて俗化して行く時は教團權能は薄らがしめる事多きに失する。且て濱田本悠師が農村寺院改革についての意見に一村一宗、寺院の公會堂化等の改革意見がかゝれてあつたが、理想とすれば誠に結構であり、實現可能ならしめば申分なしと云ひたいが哀れなる哉一般人心はそれを改革せしめる程理解がないと同時に近時至る處貧弱乍らも公會堂を別建立してゐる

ので欲しやうとしない。さりとて寺院の伽藍に對して縮少する事にも喜ばない。「おらが村さのお寺」と云ふ因襲的觀念は活動なき淋れたまゝ乍らもあるを喜ぶが村人の心……此處に像法的遺物たる伽藍は向上も時には退歩を見乍らも現狀維持の露命、住職は肅々として法燈相續伽藍相續に寺門丹誠だ、養蠶もする、田植もする、養豚養

鶏と聖僧行基たらんとする？ されどこの中に豪農あり貧農ありする、農村寺院にありながら農に同じて行基の行をなし得ず法燈淡きに悲しむものあり。秋風サツ／＼と立初むる法窓の紙破ぶれて、火の消えざるをおそれてゐる。時正に日戰交戦の非常時局皇軍の武運長久を念じつゝ。

日蓮聖人
御遠祖 藤原共資公

鈴木智久

序

日蓮大聖人の御先祖に對しては古來色々の説がありまして一定しません。日蓮大聖人は佛様の御使だから御先祖や御系圖等はどうでも良いと言ふ人があります、然し如何に大聖人が三千年の昔本佛お釋迦様の前で法華經の

御附囑を受け末法の今日本化上行菩薩の再誕として法華經を弘むの行者でありまして、御兩親がなくては此の世の中に御生れになる事は出来なかつたでせうし、又御兩親も其の御先祖がなくてはあり得ないのであります。古來偉人とか賢人とか、又は聖人とか言はれる人は大底小さい時から家庭教育、御兩親の教化によつて後年偉大